

受賞記念講演録

地域文化にフォーカスした映像表現活動の展開

伊藤 敏朗*

筆者は「第38回造園大賞」を受賞し、平成24年5月26日（土）『東京農大緑のフォーラム 2012』（於東京農大）にて東京農業大学地域環境科学部造園科学科から賞状を授与され、あわせて記念講演をおこなった。本稿は同フォーラムの受賞者講演資料に掲載された内容に一部加筆訂正して再掲するものである。

キーワード：地域文化、映像表現、メディア・リテラシー、地域貢献

The Image Expression Activities Focused on Local Cultures

Toshiaki ITOH*

Keywords: local culture, image expression, media literacy, local contribution

1. はじめに

平成24年5月、筆者は、「地域文化にフォーカスした映像表現に関する功績」によって、「第38回造園大賞」を授与された。この賞は、東京農業大学地域環境科学部造園科学科が、その前身である農学部造園学科の時代を含め、同学科の卒業生の顕著な業績を顕彰するものである。

筆者は、昭和55年に造園学科を卒業し、平成12年に東京情報大学経営情報学部情報文化学科講師となつてからは、映像メディアの表現技法の分析や、その能力開発の方法に関する研究・教育にあつてきた。

そのなかでも地域ドキュメンタリー番組の製作実践は、学生が自分たちの住む地域の問題に目をむけることで社会性を身につけ、人間的な成長が促されるとともに、その成果物が地域コミュニティの形成に寄与し得るものであるとの認識のもと、中心的テーマとしてとりくんでいるところである。

このような地域文化にフォーカスした映像表現活動の方法論をネパール連邦共和国（以下ネパール）においても展開し、同国の文化・文芸を映像メディアによって発信していく試みをおこなっている。



『情報大ステーション』の取材にあたる
千葉県立船橋高校放送委員会の生徒たち

2. 地域メディア活動の実践

(1) 千葉テレビ放送「情報大ステーション」

平成16年から18年にかけて、各年の7月から12月までの毎週1回、千葉テレビから放映された「情報大ステーション」は、東京情報大学と千葉県内の高等学校が連携して、地域の問題に目をむけ、映像でレポートするというメディア・リテラシー教育の実践プロジェクトであった。

番組では、「千葉の文化と自然」「生涯学習と地域」「イキイキ！高校生」の3つの柱から、毎回ひとつのテーマをとりあげ、情報大生と高校生の数人がチームを編成してロケ取材をおこなう。この映像素材を10分程度に編集、その後、東京情報大学内のスタジオで、映像を見ながら大学生と高校生がトークをおこない、1話15分の番組として完成させる。3年間でのべ78話の作品が放映された。

企画から取材・収録・編集の制作プロセスがすべて学生の手で実施され、施設や機材も学内のものを用い、プロの手を借りることなく、完成パッケージのかたちでテレビ局に納品された。

こうした制作方法の番組が地上波テレビ放送として毎週放映されたことは、わが国では前例



東京情報大学内のスタジオで収録にあたる
成田高校放送部の生徒たち

がなく、映像メディアによって地域と教育をむすびつけるユニークな試みとして注目された。

(2) 地域メディア活動の展開

「情報大ステーション」に前後して、伊藤敏朗ゼミでは、地元ケーブルテレビ局の番組への学生キャスターの出演、JR駅前広場のオーロラビジョンへの電子ポスターの提供、地元商店街の店舗CM制作、その他県内各地の伝統行事や各種イベント等の映像記録、DVDやテレビ番組制作などにとりこんできた。

平成19年、房総半島に残された戦争遺跡を記録したドキュメンタリー『南房総の戦争遺跡をたずねて』（15分）が千葉県メディアコンクールで最優秀賞・千葉県教育委員会委員長賞を受賞した。その後も、千葉の地域文化をテーマとしたドキュメンタリー番組の制作によって5年連続で同賞を受賞している。

平成23年度の受賞作、『まちは生きている～佐原・復興観光のおもい～』（15分）は、同年3月11日の東日本大震災によって甚大な被害を受けたまちなみを、復旧・復興するために立ちあがった佐原の人々のおもいを描いた作品である。震災を機に、地域の絆をより深めていった住民たちの証言をリアルタイムで記録したこの番組は、地元商工会議所の手でひろく市民に配布され、地域にとっての大きな励ましにもなり、マスコミにとりあげられるなど反響の大きな作品となった。

このような地域メディア活動にたいして、平成23年、千葉市から千葉市芸術文化新人賞奨励賞を授与され、これが契機となって、同年8月からは千葉市からの依頼をうけ、「千葉市シティーセールスビデオプロジェクト」がスタートした。これはゼミ生全員が、千葉市内のさまざまな魅力スポットを取材・編集して制作した3～5分ほどの短編動画を、千葉市の公式ホームページから発信していくものである。

これまでに配信された約40本の番組には、開始後半年間で3万件超のアクセス数があり、番組数をさらに増やしつつあるところである。

(3) 地域メディア活動の教育的成果

地域メディア活動の実践によって、学生には、①映像番組制作に必要な能力が習得され、メディア全般に対する理解が深まる。②取材を通じて、地域のコミュニティ、文化や環境への認識が生まれ、自らが社会に参画することの実感や意義を見いだすことができる。③目的遂行のために仲間や地域の人々と協働したり、支援してもらったりした体験を通じて、他者への感謝や尊敬の気持ちが育まれ、人間的に成長できる、などの優れた学習効果が観察された。

いっぽう、取材対象として協力してくださる地域の人々にとっても、その成果物が映像番組として記録・発信されるだけでなく、自らの地域や活動の意義を再認識し、誇るべき価値として維持発展させていくうえでのよきモチベーションとなる効果があった。

これに視聴者も加わることによって、メディア活動全体が人々のはば広い交流を生み出していくこととなる。このように、地域メディア活動は、取材対象となる住民、作り手の学生、受け手の視聴者の皆が力をあわせ、地域文化にた



ドキュメンタリー『まちは生きている～佐原・復興観光のおもい～』を取材中の東京情報大学の学生たち

いするより良き共有概念（グランド・ストーリー）を描きだそうとする協働的で創造的な営みとなり得る。

こうしたことによって、メディア・リテラシー教育とは、単なるメディアへの批判的能力の育成といったレベルをこえて、メディアを通じて社会的参画をおこなうことのできる創造的市民の育成、すなわち成熟した市民社会の形成に寄与するものとなり得るのである。

3. ネパールにおける劇映画製作

「情報大ステーション」のスタッフをつとめたゼミ生のひとりに、ネパールからの留学生、ニラジュ・ブッダ・マナダール君がいた。彼はネパールの映画産業がいかに盛んであるかを力説するのだが、ネパール映画に関する文献はほとんど存在せず、国際的な機関の統計においてもネパール映画の項目は空白になっていて、大きな謎であったことから、その実態解明に深く関心を抱いた。

平成19年から、ネパール国における映画産業の歴史と現状に関する調査を開始し、これを現地における映画制作実践を通じて研究することを目的に、中編劇映画『カタプタリ～風の村の伝説～』（51分）を製作（脚本・監督）、平成20年に完成した。

出演者とスタッフは同国の映画界のプロであり、オール現地ロケ、ネパール語によるドラマである。

本作のプロットは、〈神の山から下りてきた妖精の少女と人間の少年が心の交流をする。少年は成長し、いつしか妖精の姿が見えなくなるが、少年の心の中には、彼女が与えてくれた大切なプレラナ（靈感）が生き続け、彼をしてネパールの文化財を守る仕事へと向かわせる〉というものである。

本作には、内面的なテーマと外形的なテーマの2つがある。内面的なテーマとは、この映画が、主人公の少年が成長を遂げていくなかの、心の奥底にある純粋さ（本作ではネパール

語の「プレラナ＝靈感」という言葉で表現される）の喪失と回復を描いた物語であること。外形的テーマとは、本作がネパールの伝統的な文化、家族愛や村の風習、伝統的建築やまちなみなどの大切さを訴えていることである。

幼年時代に、妖精からプレラナを与えられた主人公は、長じてユネスコ世界遺産にも登録されているカトマンズの伝統的なまちなみ保存に取り組む。彼の活動が人々に理解されず、苦闘する姿を描くことを通じて、文化財保護の必要性や難しさについて理解を求めた作品となっている。

そして、この内面的および外形的な2つのテーマは別個なものではなく、その土地で暮らす人々の豊かな内面性があるからこそ、歴史や文化は積み重ねられていき、そのような歴史と文化の連続性の中に自らを見出すことで、人は心満たされる存在であるというのが本作の主張である。

その自明さは誰しも異論がないはずだが、忙しい現代人、ことに先進国といわれる国の人々は忘れがちであり、そのために苦しんでもいる。ネパールはその大切なものを思いださせてくれる奇蹟の大地であるというのが本作のメッセージであり、日本人の監督が本作を手がけることの意義だと考えた。



『カタプタリ～風の村の伝説』を演出中の伊藤敏朗（中央右）と、伊藤ゼミのネパール人留学生・ニラジュ君（中央左）

いうまでもなく、こうしたテーマを設定した目的は、これまで取り組んできた地域メディア活動の方法論が国際的に展開し得るかの検証にあった。近代ネパール社会の抱える問題点を訴えつつも、同国の文化や伝統の素晴らしさを讃えた本作は現地で好感をもって迎えられ、ネパール政府国家映画賞や短編映画祭批評家賞などを授与された。

この作品を見た現地の映画プロデューサーのオファーを受け、平成21年から、現地第2作となる長編劇映画『シリスコフル～花を散らす口づけ』の製作（脚色・監督）を手がけることになった。

グルカ傭兵としてビルマ戦線で日本軍と戦い、心に深い傷を抱えた男と、カトマンズの貴族の館で孤独な思索に耽る女との愛憎を描いた本作は、同国の著名な作家パリジャート女史の同名小説にして、同国文芸界の最高峰であるマダン賞を受賞した物語を原作としている。内容はきわめて精神的・抽象的であり、ネパール人にとってもその難解さでよく知られている小説である。

戦争シーンをはじめとする撮影は当地においては大規模なもので、2時間を超える大作（135分）でもあることから、製作は困難をきわめたが、ネパール文芸の精華を世界へ発信する試み



ネパール映画第2弾『シリスコフル～花を散らす口づけ』の一場面、ビルマ戦線シーンのロケセット

としてとりくみ、平成24年4月に完成、平成25年3月、カトマンズ市内の映画館にて上映されるはこびとなっている。

4. おわりに

ドラマ、ドキュメンタリーを問わず、映像表現に関わるさまざまなとりくみの中で、その土地の風土と歴史の総体として営まれる人々の生のあり様、すなわち文化というものをどのように表象していくかが、常に作品の屋台骨になるものだと感じている。いいかえれば、土地に根ざすところのない物語や人物造型はリアリティを欠き、人の心をうたない。この点において、地域メディア活動と造園的視点による地域づくりの哲学とは自然に重なりあうものといえるだろう。

造園学科における学び、恩師や学友との交流を通じて培われてきた精神は、いまでも自らが手がける映像作品の根底に流れていると感じる。あらためて感謝を申し上げたい。

【参考文献】

- 伊藤敏朗：地域の番組作りをとおしてメディア教育を～情報大ステーションの挑戦：視聴覚教育 705号～709号連載
 伊藤敏朗・松田實：多メディア時代の映像づくりを考える－“地域の絆”を再生する映像制作活動：視聴覚教育 Vol.747, 60-65
 伊藤敏朗：ネパール映画の全貌－その歴史と分析－ 凱風社（平23.10）